

「中国共産党百周年と日中関係～日本が中国共産党設立・辛亥革命の“後背地”だった～」

東海日中関係学会会長 川村範行（名古屋外国語大学名誉教授、中日新聞元論説委員）

中国共産党設立やそれ以前の辛亥革命で中心となった人物は日本と深い関わりがある。日清戦争でアジアの大国清国が小国日本に敗れたことが、中国人の意識を大きく変えた。日本の明治維新に学べと、清国から留学生が続々日本へやってきて、祖国の建設に命をかける人材が輩出された。

- ・最大の受け皿となったのが東京専門学校（1902年に早稲田大学に改称）

清朝政府が日本に最初に送り出した留学生は東京専門学校に入学

早稲田大学に改称後の1905年に「清国留学生部」設置、日本の大学で初めて中国語の授業科目を設置
孫文の片腕となって辛亥革命を成就させた宋教仁や黄興等も

付属の高等予科には廖仲愷（中央大学卒業、留日中に孫文と親交、のち国民党幹部。廖承志の父親）

- ・中国共産党創立の中心人物の一人、李大釗

天津の北洋法政学堂（専門学校）を卒業後、1914年に早稲田大学政治経済学部に入學

人道主義的社会主义思想の安部磯雄教授の影響

祖国袁世凱政権への批判運動を展開 → 対華21カ条要求への反対運動の先頭に

1916年早稲田大学「長期欠席除名」帰国

- ・中国共産党の創設に携わる陳独秀

早稲田大学留学中の李大釗と1915年に出会い意気投合

1901年に日本留学（成城学校＝現、成城中学・高等学校）、前後5回日本を訪問

帰国後、上海で「青年雑誌」（のち「新青年」）を発刊

1916年に北京大学の文化学長に就任、李大釗を北京大学に推薦、教授に

- ・1921年7月、上海で第一回中国共産党全国代表大会

党発起メンバーの李大釗や陳独秀は参加できず

参加した13人のうち薫必武（日本大学留学）など4名が日本留学組

- ・2008年12月、西原春夫・早稲田大学元総長が北京市郊外の北京市万安公墓にある李大釗の墓参

「中退した母校の後輩に当る総長がお詣りに・・・泉下の李大釗はどう思っただろうか」－『日本の進路』

2021年6月号に「命がけで活躍した中国人青年の想いが乗り移った私」と題して寄稿。

- ・江沢民、胡錦濤両国家主席 1998年、2008年に国賓来日、ともに早稲田大学で講演

胡錦濤：中国の改革開放政策を支援した日本への感謝の言葉を中国のトップとして初めて表明

辛亥革命や中国共産党設立に尽力した先人たちが早稲田大学など日本留学した事は言及無し

- ・習近平国家主席 10月9日、辛亥革命110周年の重要講話「中国共産党が孫文の後継者」

梅屋庄吉や宮崎滔天など日本人が孫文を支援した事の言及無し

- ・周恩来総理 1917年来日、東亜高等予備学校に学ぶ “早稲田大学の中国人留学生を何度も訪問した”

亡くなる前「どこにも行きたくないが、日本には行きたい」

*「歴史を鑑に」とは：日中戦争の歴史のほか、それ以前の辛亥革命や党設立に尽力した先人たちの日本留学歴や日本人との親交含め、お互いに教え、教えられ、助け、助けられた面も含め、両国民が日中交流の歴史を客観的に知り、認識すること。